

川柳 江戸の四季

中公新書 1357

ISBN4-12-101357-3

C1239 ¥680E

定価

本体 680円 + 税

中公新書 1357

下山 弘著

川柳 江戸の四季

祭・祝い・信仰・遊び

中央公論社刊

下山 弘 (しもやま・ひろし)

1938年(昭和13年), 群馬県前橋市に生まれる。青山学院大学文学部卒。神職。東京古川柳研究会会員。

著書『遊女の江戸』(中公新書)

『江戸古川柳の世界』(講談社現代新書)

『川柳のエロティシズム』(新潮選書)

『お江戸怪談草子』(新潮社) 他

川柳 江戸の四季

中公新書 I357

©1997年

検印廃止

1997年 4 月15日印刷

1997年 4 月25日発行

著 者 下山 弘

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

◇定価はカバーに表示してあります。

◇落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-12-101357-3 C1239

まえがき

川柳^{せりゅう}は、江戸の庶民の生活・風俗に題材をとった文芸で、そこには庶民の感情・考え方が窺え
ると言われている。そうであるなら、川柳をうまく整理すれば、江戸っ子たちの四季の生活誌が
できるのではないか。このような考えで執筆を試みた。

川柳が貴重な風俗資料であることは疑いを入れない。しかし一つ注意が要るのは、川柳は記録
文書ではなく、一種の詩であるということで、詩であるからには、感興を高めたり表現を整えたり
するための技巧が伴う。だから川柳には生活・風俗が実景そのままに描かれているとは限らな
いし、また題材がオールラウンドにあるいは平均的に取り上げられているでもない。そうでは
あっても、あるいはそうだからこそ、当時の人々の感情・考え方がここには表われているわけで、
それを読み取るのが歴史の資料とはまた違った古典文芸を読む楽しみであると思う。

しかし、ここでもう一つ注意を要することがある。川柳には当時の人々の一般的な感情・考え
方が表われているのかというと、そうではない。言うまでもなく、川柳作家たちの感情・考え方に
すぎないのである。では、川柳作家というのはどんな人間だったのか、その概要を箇条書きに

してみる。

(1) 性別Ⅱ男が圧倒的に多く、女は少なかった模様。

(2) 年齢Ⅱはつきり分らないが、青年・壮年層が中心だっただろう。

(3) 身分Ⅱ士農工商のすべて。ただし、士と商がとりわけ多かっただろう。

(4) 資産状況Ⅱ極貧層はたいへん少なく、いわば中流生活の人々が多かったはず。もっとも、武士についてはこの限りではない。

こうしたかなり幅広い層の人間が作ったにもかかわらず、川柳にはある種の共通した味わいがある。「東都の川柳(やなぎだる)浪華の冠附(かむりつけ)（笠附(かさつけ)）は其土地に附(つ)たる物にて、他国の人の真似るべきもあらぬ業なり」と述べているのは、大坂と江戸で歌舞伎作者を勤めた西沢一鳳(にしざわいつほう)である（『皇都午睡』）。

こうして見ると、川柳に表わされている生活・風俗やそこに窺える感情・考え方は、あくまでもこの文芸の世界のものである。だからこの本は、江戸の四季の生活誌に事寄せた川柳鑑賞の読み物であると、読者の方々には考えていただきたい。

ふだん何気なく使っている川柳という呼称について、手短かに説明しておく。川柳は前句(まえく)付(つけ)に端を発したもので、前句付とは、前句という題に合わせて、付句(つけく)を作る文芸である。たとえば、

「まめな事かな、まめな事かな」という前句に対して、次のような付句を作る。

イ 料理人うなづきながら市へたち

ロ ちよっちよつと姑しゅうとをさそうよめの母

ハ 麦めしの馳走に和尚水かげん

ニ 遣唐使天竺までも行く気なり

ホ 髪結ひはにきびを抜くがおまけ也

(以上いずれも『川柳評明元仁』)

これら付句の一句一句は、前句「まめな事かな、まめな事かな」と合わせて読むと、なるほどと納得がいくことだろう。このわずかな例にも、川柳を特色づけるいくつかの点を見出すことができる。ニ以外はいずれも人間のちよつとした行動に着目している、ロ・ホは行動の裏に隠された心情を穿うがっている、ニは歴史上の事柄を勝手に我流がりゅうの想像で楽しんでいる、すべての句が作者の感懷を表わさずに描写に徹している、やはりすべての句が滑稽を捏造せずにユーモア（ヒューマニティ）を醸かもしている、などである。

前句付は俳諧から派生したもので、他のさまざまな文化と同様に上方で発達したのだが、十八世紀半ばになって江戸で大流行した。流行の要因の大きな部分は、一人の卓越した点者てんじや（宗匠）が出現したことであって、それが初代の川柳（柄井からい姓）である。彼がたいへん優れた点者であったというのは、彼の選んだ句は他の点者のそれよりも概して面白い。現代のわれわれにとって面

白いだけでなく当時の人々にとっても面白かった証拠に、彼のところに寄せられた投稿の数は抜群に多かった。十日ごとの締切にしばしば一万数千句も集まり、時には二万句以上にも達した。他の点者の何倍もの数である。

選んだ句は一枚摺の紙に摺って発表されたが、柄井川柳が点者を始めてから八年目に、一枚摺の中からさらに秀逸の句を抜粋して、本の形の句集を出版した。これを『誹風柳多留』はいふうやなぎだる（略して『柳多留』）という。その際に前句は省いて、五・七・五、合計十七文字の付句だけを掲載した。これが現代まで引き継がれている「川柳」の型である。

柄井川柳は、宝暦七（一七五七）年から明和・安永・天明を経て寛政元（一七八九）年まで点者活動を行なった。この間に出た約千四百枚の一枚摺から厳選した『柳多留』は二十四篇に達し、また他にも彼の選句による句集が数冊できた。私は本文で「川柳の時代」という言葉を使っているが、それはこの三十三年間をいう。

彼の死後も「川柳」は作られ、『柳多留』は百六十七篇まで続くのだが、句の内容が川柳の時代とはかなり異なるものに変わるので、同じ範疇に入れて考えるのは難しいというのが私の見方である。したがって、この本にはそれらは一切採用しなかった（以上、川柳の発端や変遷については、拙著『江戸古川柳の世界』に多くの例をあげて説明してある）。

その一方で、川柳の時代に活動した他の点者の選句には、彼と感覚が似かよったものがある。

それでそういう句はこの本に採用した。句の末尾に『露丸評』『幸々評』『鱗舎評』などと記してあるのはそれらの句をいう。

川柳と俳句はどう違うのか、という質問をよく受ける。その答に代えて、俳句（当時の呼称は発句）も随所に掲載して読者に比較していただくことにした。ただし芭蕉とか一茶とかの発句をやみくもにあげても意味がないので、川柳の時代の代表的な宗匠・存義（ぞんぎ）の『古来庵発句集前編』（明和三年刊）の句だけを採った。存義の発句は文学史的にどう評価されているのか私にはよく知らないが、彼が屈指の俳人と言われていた時代を背景として川柳は大流行した。

庶民文芸の一端を担うのは民謡である。川柳の時代の明和九（一七七二）年に出た『山家鳥虫歌』という全国の民謡集があるので、これからいくつか引用した。また、「めりやす」その他江戸で流行した音曲の詞章も引用した。

以上の文芸とは別に、記録文学に描かれた世態を参照する価値も当然あるだろう。それで、年中行事、地誌、またさまざまな随筆も適宜掲げることにした。

川柳は十七文字の短詩形式であるため、作者の制作意図を察して句の意味を解するのはなかなか難しい。複数の解釈が成立するケースが多いのである。この本は研究書ではないから、この点

の吟味には触れずに、先学の業績を尊重しつつ一種類の解釈しか載せないことにした。

川柳にしても他の引用文献にしても、表記方法は必ずしも定まっていない。歴史的かなづかいが守られているわけではなく、表音表記も多いし、また当て字とか、現代では用いられない文字づかいも多い。この本に掲載するにあたっては極力原文を生かす方針にしたが、あまりに読みにくい箇所、したがって説明が煩雑になってしまふところは、文字を置き換えたり仮名を振ったりした。促音「っ」、拗音「ゃ」などは現代風に小文字を用い、また現代的な句読点を適宜施した。このように手を入れたことによつて原文の味わいが損なわれる、または意味が取り違いされることがあるとすれば、それは私の無学不才に帰するところである。

川柳の出典の表記について

句集は次のようにフルネームで表示した。ただし、*印のものは頭に「俳風」の文字が付くが、これは省略した。

『*柳多留』『*柳多留拾遺』『さくらの実』『川傍柳』『藐姑柳』『やない筈』『柳籠裏』『玉柳』『*末摘花』

万句合まんくあわせ（柄井川柳が前句を出題して投稿を募つった興行で、右記の句集の主要な原典となったもの）は、慣例に則り次の例のように表示した。

『川柳評安八礼』（安八は安永八年の略、礼は一枚摺の紙に付けた符号）

『川柳評明三満』（明三は明和三年の略、満は一枚摺の紙に付けた符号）

他の点者の催した万句合（『露丸評』『幸々評』『鱗舎評』など）もこれに準ずる。

目次

まえがき

I 春

I

藪入 2 大師縁日・天神祭 9 巳待・日待 13 二日
灸 17 初午 20 彼岸会 24 花見 28 雛祭 34 出代 39
汐干狩・梅若忌 46

II 夏

53

更衣・灌仏 54 時鳥・初鯉 59 端午の節句 64 五月
雨 70 夕涼み 74 山王祭 80 土用干・暑気見舞 85
夕立 89

III 秋

95

七夕 96 草市・玉菊灯籠 101 大山参 105 八朔 110 八
幡祭 113 月見 119 紅葉狩 123 秋の食べ物 128

IV 冬

135

炉開 136 十夜・御命講・御講 140 恵比寿講・ふいご
祭 145 七五三 149 棕鳥・伊勢の御師 152 煤掃 156 薬
喰・ふぐ 159 雪見 162 年の市 165 寒念仏・裸参り・
節季候・厄払 168 数え日・年忘・餅つき 170 掛取 175

V 年越と正月

181

年越 182 門松・年礼 186 百人一首・正月の遊び 191
万歳・鳥追・太神楽 196

掲載句索引

200

参考書目

216

I 春



十軒店の雑市

藪入

藪入やぶいりに母はお飯わかしの水を引き　（『柳多留二篇』）

正月気分がやっと抜けようという一月十六日（および七月十六日）は、商店に住み込みで奉公している我が子が、藪入という休暇で帰ってくる。その子の口に合うよう、ご飯を硬めに炊くのが、母親の心尽くしである。齒の弱った夫婦はふだんは柔らかいご飯にしているのだが、今日ばかりはお釜の水を少なめにしてかまどに掛ける。

なにしろ半年たてば見違えるように成長する年代の子だから、親はこの日を待ち焦がれている。帰ってきた子には、盛りだくさんのお膳を用意してやり、またあちこちの盛り場や芝居などへ連れ出す。食べたい盛り、遊びたい盛りなのに、毎日毎日がまんして奉公している子が、なんといいとおしいことか。

藪入は内に置かぬが馳走なり　（『川柳評安八礼』）

子供当人も、藪入を待ち兼ねているのは言うまでもない。わずか一日の休暇ではあるが、ふだんは朝から晩まで奉公先の主人の監督下にある身だから、この日は待ちに待った自由の一日なの

だ。主人の側では多少の小遣いを支給し、親元に帰る子にはわずかな贈り物を持たせる。

山門へ上るまいぞと二百やり　（『柳多留七篇』）

山門というのは、この日に上野の寛永寺の文殊楼もんじゅうろうという山門と、芝の増上寺の山門が、一般に公開されるのである。そんな高い所に登れる機会はめったにないから、大勢の人で賑わう。「上がるまいぞ、あそこは危ないから」と注意しながら、二百文の小遣いをやるのである。

この日はまた、閻魔えんまの斎日さいにち（地獄の釜の蓋があき、亡者もこの日だけ苦痛から解放される日という）にあたるので、あちこちの閻魔堂に藪入の少年たちが集まる。人は死ぬと閻魔様の前に引き出されてお裁きを受けるといわれるが、あの怖い形相を見るのも、わんぱくたちには楽しみの一つである。

友達に閻魔の庁で御用逢あひ　（『川柳評安八礼』）

御用とは、酒屋の御用聞き。

奉公人たちが出払ってしまうと、主人の家族は不便な思いをしなければならない。ふだんから商売にも家事にも顎の先で使っているのだから。

斎日はちっさな用に事を欠き　（『柳多留十一篇』）

藪入の日に親元に帰れない子も少なくない。というのは、日本橋や京橋などの表通りに店を張るような大きな店は、その多くが上方商人の出店でみせ（支店）で、奉公人はおおむね郷里で採用され、

はるばる江戸へやって来て商売の修業をしている。たとえば日本橋の越後屋（三井）では、三井家の分家や別家の子弟が多数を占める。彼らは十二、十四歳くらいで雇われると、親や兄弟の顔が見られるのは、本店召喚と帰郷休暇を兼ねた機会を待たなければならぬ。それまでに数年かかる。これが「お江戸日本橋七ツ立ち、初のぼり」の初のぼりである。その後も数年ごとに帰郷するが、これらを総称して中のぼりという。

中のぼり友達は皆だいて来る　（『川柳評明三満』）

故郷の友達は皆赤ん坊を抱いて来るというのに、奉公の身はまだ独身に甘んじなければならぬ。結婚できるのは、暖簾分けをしてもらって別家を立ててからのことで、四十歳前後になってしまう。

親に甘えることもできず、いたくも言えずに、日本一の繁華な都会で青春時代を過ごしていると、ふとした誘惑に負けてしまう者も少なくない。店の金を使い込んだのが発覚して当人を調べたら、ほとんど買い食いに使ってしまったという哀れな話もある。

手代ども根太盛りで案じられ　（『柳多留初篇』）

体のあちこちに根太（腫物）のできる脂気たっぶりの年代だから、女郎買いを覚えた手代たちが大金を着服するなど、時には店にとって深刻な問題になることさえある。こういう問題を起こして郷里に送り返されるのを、つけのぼせという。

ながつばねじゅう
長局中で惜しがるつけのぼせ (『露丸評明四・28』)

この句の場合は、呉服屋の手代らしい。長局つまり武家の奥女中たちの人気者になるようないい男——男前で、頭が切れそうで、弁舌さわやか——が、得てして問題を起こすものである。一度うまい酒を呑み遊女の柔肌を知った若者は、さんざん叱られて上方へ送り返され結局解雇されるのだが、その旅の途中でも焼け棒杭に火となる。次の句の御油(愛知県豊川市)は、遊女のいる宿場町。

つけのぼせ御油のあたりで再発し (『幸々評明八雅』)

ともあれ、こうした奉公人をかかえる上方商人の出店は、一流の大店である。負けん気の強い江戸市民も、文化の先進地には一目も二目も置かざるを得ない。

番頭が江戸言葉ではげびるなり (『柳多留二十三篇』)

こういう江戸市民のコンプレックスを利用して、わざと京談(京都の言葉)を使う行商人もいる。

木綿売り京談を言ふいらぬこと (『柳多留十二篇』)

上方商人の出店が多いということは、上方の産物の需要が高いからに他ならない。酒、織物、陶磁器、細工物、その他いろいろの商品、すなわち上方から移入された下り物(くだもの)が高級品とされているのである。地場製品、つまり下らない物は、間に合わせの劣悪品と見られがちだ。実際には